

# 『老い』と『死』を 再考する

遠藤 薫 学習院大学 法学部教授



## 1. はじめに一死と死の絆

あの東日本大震災の後、何が起こったのかを理解するために、私は何度か三陸地域を訪ねた。そのとき、とても印象深かったのは、海からほど近い切り立った山々に並ぶ夥しい墓石群だった。

震災後、歴史のなかで繰り返し過酷な津波災害を経験してきた人びとが、なぜ危険であることがわかりきった海辺に集落をつくるのか、なぜ高台に住まないのか、という疑問が多く識者から出された。「ここより下に住むべからず」と書かれた津波碑も紹介された。しかし、震災から5年たった現在も高台移転は必ずしも進んでいない。その理由は色々あるだろうが、日々、海から生活の糧を得ている人びとにとって、(少なくとも過去において)たとえ危険であったにしても、海辺に住むことは「必然」であったことを忘れてはならない。

代わりに、死者たちが高台から生者たちの世界を見守っていた。墓石群に混じって、古い時代の津波碑や海難碑、飢饉の碑も、海に向かって立ちならんでいる。山裾のそこここには山神の结界がはられ、無闇と山に入ることを禁じている。山もまた危険な地域であった。と同時に、山と海は天界を通じてつながっていると考えられていたのかもしれない。死者たちはこの世を去っても生者たちを想いつづけ、生者たちは死者たちのまなざしに支えられて、自分たちもまたやがて死ぬときまで日々の生に勤しむ。

そんな世界観は、現代ではすっかり忘れ



図1 山腹を埋める墓石群  
(2014.11.5 釜石市石応禅寺, 遠藤撮影)



図2 山裾に並ぶ鳥居 (2015.2.19 大槌町 遠藤撮影)

られてしまった。いまでは非合理と一笑に付されるものかもしれない。しかし、そこには、私たちの〈社会〉の根源的な性格が潜んでいるのではないか。「高齢社会」の諸問題が問われるいま、私たちは改めて「生と死の絆」に思いをはせる必要があるのではないか。



## 2. 「高齢社会」は「問題」なのか？

「社会の高齢化」が言われて久しい。『平成27年版高齢社会白書』によれば、平成26(2014)年現在で、「65歳以上の高齢者人口は、過去最高の3,300万人(前年3,190万人)となり、総人口に占める割合(高齢化率)も26.0%(前年25.1%)と過去最高となった」。一方、出生数は減少を続けているため、「昭

和25(1950)年には1人の高齢者に対して12.1人の現役世代(15~64歳の者)がいたのに対して、平成27(2015)年には高齢者1人に対して現役世代2.3人になっている。今後、高齢化率は上昇を続け、現役世代の割合は低下し、平成72(2060)年には、1人の高齢者に対して1.3人の現役世代という比率になる」と前掲書は論じている。

数値で示されなくとも、街で周囲を見渡せば、社会の高齢化が進んでいることはすぐにわかる。かつて都会の盛り場や観光地は、若者たちでいっぱいだった。しかし、いま、(原宿や渋谷など一部を除いては)、高齢者たち(と呼ぶのがおかしいほど元気な)が街を闊歩し、旅を楽しんでいる。20年くらい前まで、日本では、買い物や旅行は若者や働き盛りの年代のものだった。海外へ行くと、高齢者や車いすに乗った人びとも積極的に町歩きや名所探索を楽しんでいて、日本に比べてうらやましくも感じたものだった。現代では日本でもそのような風景が当たり前になった。それは、良いことではないのか。

にもかかわらず、先の『高齢社会白書』もそうだが、高齢者を社会の「負担」とみるような口吻は多い。例えば、『平成25年版情報通信白書』でも、「超高齢化社会がもたらす課題」として、(1)生産年齢人口の

減少、(2) 社会保障費の増大、(3) 介護負担の増大、を挙げている。同書はまた、これらの課題の解決策として、「アクティブシニアの戦略的活用」を挙げている。確かに、シニアがアクティブで、社会的にも有用とされることは、本人にとっても望ましいことだ。しかし、人は誰も、年齢にかかわらず、本意ではなく「アクティブ」でなくってしまうリスクを抱えている。社会に「活用」されない人は、社会の「負担」なのだろうか。



---

### 3. 『老い』と『死』の風景の変化

数年前、実父は85歳で、義父は90歳で亡くなった。二人とも、亡くなる直前まで元気に生活していた。実父は事故だったからなおさら、急な死に呆然とした。

ある日突然やってきた親の死。とにかくきちんと弔わねばと、病院と提携している業者に委託した。それ以上の知識がなかったからやむを得ないことではあったが、葬祭業者の取り仕切る葬儀は、ただ機械的に進行し、奇妙に現実感がなかった。

父の葬儀に立ち会いながら、私は祖父の葬儀を思い出していた。20年以上前になるだろうか。祖父は横浜の下町に住む一庶

民だったが、親族だけでなく、隣近所が集まって、賑やかに通夜・葬儀がおこなわれた。弔問客は途切れることなく、通夜の会場では、集まった人びとが酒を飲み、寿司をつまみながら「もう少しで100歳だったのに」とか「99歳まで生きて大往生だ。めでたい」などと声高に歎き、笑い、夜を徹して思い出話が語られていた。

それに比べると、叔父が亡くなったときも、父が亡くなったときも、義父が亡くなったときも、都市部ではすでに「隣近所が総出で行う葬儀」というしきたりはなくなってしまった。故人も生前「大がかりな葬式はいらない。親族だけで頼む」と言っていたので、「合理化された葬儀」でいいといえはいいのだけれど、何かしら寂しいような割り切れない気分が残った。



---

### 4. 『生』の周縁・『死』の周縁

その「割り切れなさ」は、たぶん、「生」と「死」がぶつんと分断されてしまうような感覚によるのかもしれない。昨日まで元気であった者が今日突然旅立ち、二度と話すこともできない。十分に思い出を蘇らせる間もなく、彼らの重ねた日々が、社会から消し去られてしまう。

しかし、高齢者にとっては、そのような「死」は一種の「理想」と感じられるのかもしれない。一時期、「ポックリ信仰」が話題になったことがあった。死ぬ瞬間まで元気に働き、「ポックリ」と一瞬で死んでしまうことを神仏に祈る信仰である。背景には無論、加齢によって身体能力が低下し、あるいは病気で寝たきり状態になったり、認知症になったりして、家族や親しい者たちに負担をかけることへの恐れがある。木村（1993）によれば、『『ポックリ』信仰は民俗であって、昔から誰しも願っていたことであり、何も現代人なるが故に、現代に特有な信仰というわけではない』が、松崎（2007）は「昭和四〇年代以降」の水子供養とポックリ信仰の流行について、「これらの流行は、日本社会が多産多死から多産少死の期間（昭和初期から昭和二五年頃まで）を経て、少産少死の社会へと短期間に急激な人口構造の変化を達成し、少子化・高齢化者社会を迎えたことが背景にある（p.82）」と述べている。いいかえれば、むしろ高齢社会において、高齢者を「負担」とする視線が高齢者に内面化され、それが「ポックリ信仰」として現象したということであろう。それは「高齢者」の「現役世代」への優しさだろう。しかし、「現役世代」もいつか、高齢者になる。「現役」でなければ「負担」と見なす社会は「幸福な社

会」といえるのだろうか。



## 5. 『弱きもの』へのまなざし

現役でなくなった高齢者を負担と見なす社会は、これから社会へ入って行こうとする者たちに対しても優しくあることができない。

前掲の松崎（2007）も述べているように、水子供養とポックリ信仰は同時期に流行した。すなわち、健康や経済の問題から、出産をコントロールすることが一般化したのが少子化の背後にあった。多産による貧困や社会的状態の悪化のリスクが高かった時代に比べ、出産のコントロールは福音でもあった。しかし、そのようなコントロールは、必ずしも幸福な選択ではない。さまざまな理由から出産を望まないとしても、生命に対する畏れは、生まれてこなかった命に対する行き場のない痛みとなって、親となるはずだった者たちを傷つける。その声にならない悲鳴が、寺社に立ち並ぶ愛らしい水子地蔵として具現しているのかもしれない。

だが、注意しなければならないのは、痛みを感じなければならないのは、「親にならなかった親たち」ではない。「親とならないこと」を個人の責としがちな社会の側であ

る。「高齢化」と並んで「少子化」を社会問題としながら、まだ社会からの庇護を必要とする幼い生命たちを迎え入れる用意が十分でない社会は、「子どもを産めない社会」という危うい状態にあるといえよう。待機児童や育児休暇などの問題解決をなぜ優先課題にしないのか。

近年、報道では、連日のように、老人ホームや、保育施設や、家庭、学校、組織における虐待やいじめを伝えている。それ

らはしかし、虐待を行う個人の問題としてではなく、「強きもの」「社会にとって有用なもの」以外を「負担」視する社会の問題として捉える必要がある。

結局、高齢者が社会的負担となることを恐れる社会、親世代が子育ての負担を担いきれないと感じる社会であることと、強者によって弱者が傷つけられて当然と考える社会であり、高齢化問題、少子化問題、集団内虐待の問題は一続きの問題なのである。



図3 東京都港区増上寺の水子地蔵たち (2004.5.1 遠藤撮影)



## 6. 状況に応じて社会を再設計しよう

年齢、性別、国籍など、私たちは単なる属性の違いを、あたかも人間としての違いであるかのように思い込みがちである。

しかし、元来人間は一人一人千差万別である。人口学的な属性も個性の一つである

うし、身体の状態もまた、必ずしもわれわれが任意に選び取れる事柄でない個性の一種である。社会における人口学的、健康学的な分布の差異や変化も、社会ごとの個性といえよう。

高齢化率が高く、出生率が低いことは、それ自体で悪いことではない。過去の時代、高齢化率はずっと低かったが、それは若くして

死ぬものが多いことの裏返しでしかなかった。出生率の高さは、貧困層をさらに貧困化させる大きな要因であった。

どこにあるのかわからない「理想の社会状態」からの距離によって「少子高齢社会」を問題化し、個人の「やる気」や「努力」や「社会貢献」に頼るような解決策は捨てよう。現在と予想される近未来の社会状態をまずは与件として引き受け、その社会をいかに「幸福な社会」として運営するかを考えよう。



## 7. 生と死を包摂する社会を

最後に、岩手県遠野市にある「デンデラ野」についてご紹介しておきたい。

民俗学の創始者である柳田國男は、『遠野物語』に「山口、飯豊、附馬牛の字荒川東禅寺および火渡《ひわたり》、青笹の字中沢ならびに土淵村の字土淵に、ともにダンノハナという地名あり。その近傍にこれと相対して必ず蓮台野《れんだいの》という地あり。昔は六十を超えたる老人はすべてこの蓮台野へ追い遣るの習《ならい》ありき。老人はいたずらに死んで了《しま》うこともならぬ故に、日中は里へ下り農作して口を糊《ぬら》したり。そのために今も山口土淵辺にては朝《あした》に野らに出づるをハカダチとい

い、夕方野らより帰ることをハカアガリというといえり」(p.62)と記している。文中の「蓮台野」が「デンデラ野」に対応する。

この記述は、一般に「姥捨て」、すなわち働けなくなった高齢者を生者の社会から放逐し、高齢者は年若い者たちを思いやってそれを受け入れる、貧しい社会の悲惨な風習と理解されている。しかし、実際にその場へ行ってみると、高齢者たちが住んだというデンデラ野はむしろ日当たりの良い丘の中腹で、集落からほとんど離れていない。「姥捨て」という言葉から連想する陰惨な感じはない。確かにそこは、集落の外部に位置づけられ、共同墓地ともなっていた「ダンノハナ」へ続く、死への準備の場所であったかもしれない。しかし、日中は若い者たちの仕事の手伝いをするので、生活の手当もきちんと考えられていたことをみれば、むしろ（実際状況はどうであったにせよ）「ホスピス」のような社会的装置として設計されていたとも考えられる<sup>1)</sup>。少なくとも、そこには、誕生-成長-加齢-死を、循環的全体として社会に組み込む世界観が埋め込まれているのではないか。

「老い」や「死」は、誰にとっても他人事ではない。誰もが共有するこの宿命を直視し、「生」と「死」を包摂する世界観を、現代社会に適用する工夫が、いま求められている。



図4 遠野のデンデラ野(右手に見える突き出た丘がダンノハナ)(2014.9.4 遠藤撮影)

1) いうまでもなく、過去をノスタルジックに美化することは慎まねばならない。当時の社会状況は現在とは比較にならぬほど過酷であり、人びとは常に究極の判断を迫られていたことを前提に理解していただきたい。

【参考文献】

遠藤薫 [2014] 「〈生〉と〈死〉のシナジーを求めて—「高齢社会」再考」今田高俊他・編『シナジー社会論—他者と共に生きる』東京大学出版会, 153-170

遠藤薫 [2015] 「東日本大震災後の日本社会における〈地域〉へのまなざし—2015年5月全国調査によ

る〈死生観〉と社会関係資本」『学習院法学会雑誌』2015年9月

遠藤薫, 2016, 「現代人にとって「いのち」とは何か—生命倫理に関する意識調査結果から」『学習院法務研究』第10号(2016年1月), p.187-195

木村博, 1993, 「現代人と『ポックリ』信仰」仏教民俗学大系編集委員会・編『仏教民俗学大系一・仏教民俗学の諸問題』名著出版。

松崎憲三, 2007, 『ポックリ信仰—長寿と安楽往生祈願』慶友社

柳田國男, 1989, 「遠野物語」『柳田國男全集4』筑摩書房, p.7-77

プロフィール……………  
えんどう・かおる 東京大学教養学部卒業。東京工業大学大学院博士課程修了。博士(学術)。信州大学助教授、東京工業大学大学院助教授を経て、現在、学習院大学法学部教授。専門は理論社会学・社会情報学。主な著書は、『電子社会論』、『インターネットと〈世論〉形成』、『メディアは大震災・原発事故をどう語ったか』、『社会変動をどう捉えるか 1~4』、『廃墟で歌う天使』、『ソーシャルメディアと〈世論〉形成』など多数。